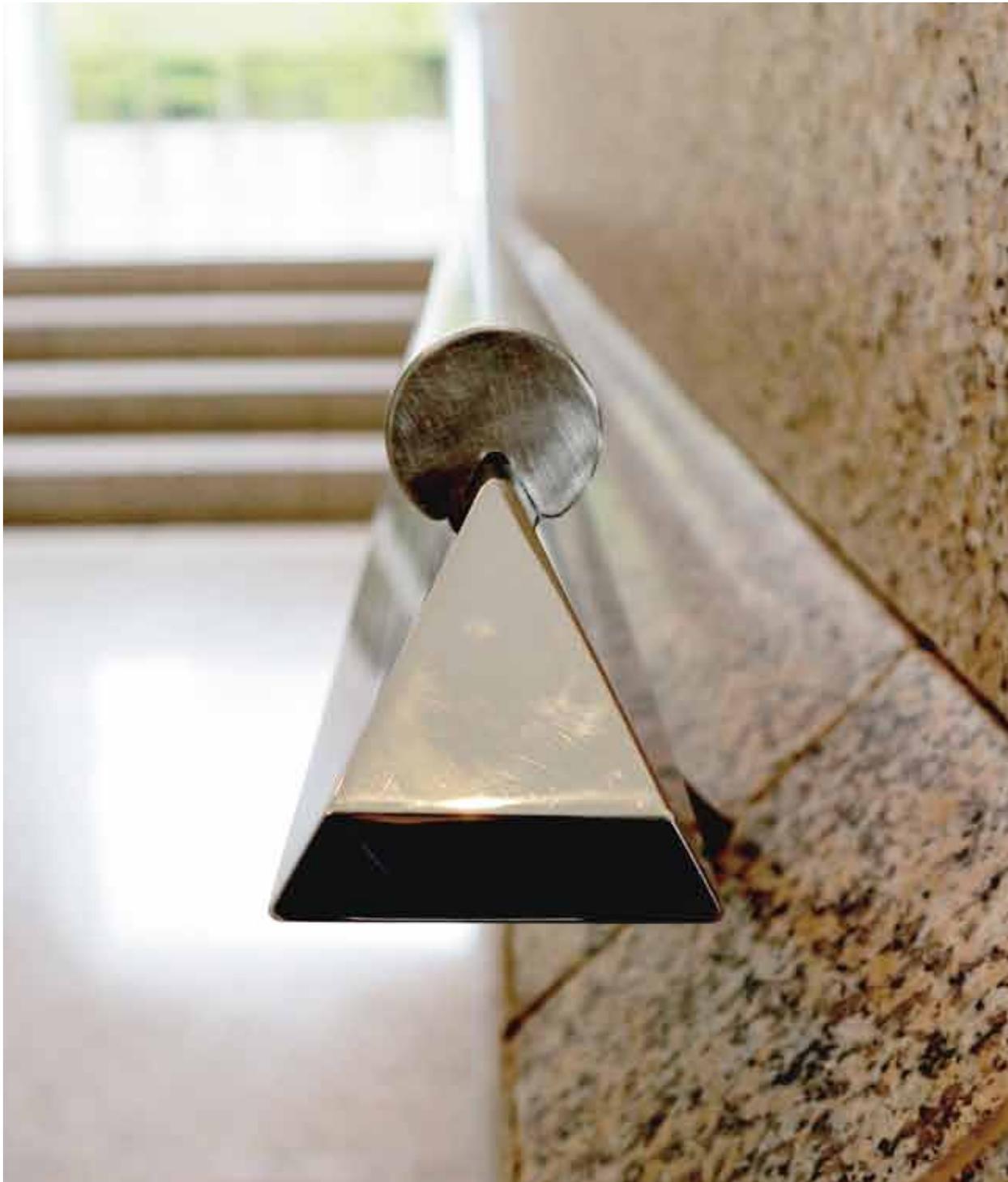


126

2019 AUTUMN

美術館NEWS



「美術館の紹介」Vol. 26

前回に引き続き、館内で多数用いられている
三角形をご紹介します。2階展示室前では、
円と三角のモチーフが形づくる手すりが
中庭からの陽光に照らされる。
金属の冷やかな色味と重厚さは、
花崗岩の華やかさから際立つ存在感をもっている。

熊谷守一の見つめかた

三井 麻央(学芸員)

熊谷守一(明治13(1880)-昭和52(1977)年)は70代後半から没するまでの約20年間、ほとんど外出することなく自邸でたくさんの動植物に囲まれて生活していたのだという。9月28日(土)より開催の特別展「熊谷守一 いのちを見つめて」でも、庭の草木やその周りに群がる虫、飼っていた鳥や猫など、小さな愛らしい「いのち」を描いたこの時期の作品が多数紹介される。決して俗事にとらわれず、誰にも傲らず、静かに一日一日を過ごし「仙人」と呼ばれた熊谷の人柄、白く長い髭をたくわえた個性的な外貌、独特の線と色面で描かれた猫やうさぎたち——。ひと目見ると忘れられない熊谷の作品と人物像を、展覧会ではきっと堪能していただけることだろう。しかし、本展で概観できる画学生時代から最晩年に至るまでの熊谷の画業をたどってゆくと、よく知られた彼のイメージとは少し異なるひそやかな試行錯誤の跡もうかがえる。ここではいくつかの作品とともに、光と色、形という側面から熊谷の作品を見つめてみよう。

光は、熊谷が生涯関心を寄せつづけた問題のひとつだった。東京美術学校(現在の東京藝術大学)を首席で卒業したのち、明治42(1909)年の第三回文展に出品された《蠟燭(ローソク)》(図1)は、熊谷の光に対する強い関心を率直に看取できる若年期の作品だ。後半生にあらわれる明瞭な輪郭線や鮮やかな色面で構成された作品群とは対照的な、対象のはっきりしない暗褐色の色彩を熊谷はこの時期多く用いている。

熊谷は50代ごろまで、画家としての活動を決して盛んにはしなかった。むしろ制作は後半生に比べると少数にとどまり、貧困に苦しんでもなお売るための絵など描けず、ひたすら色や音の研究に励んだ時期もあった。大正14-15/ 昭和元(1925-26)年ごろのものと推定される、「MK」雑記帳と分類されたノートがある(図2)。ここには色彩学に関する文献から得た知識や写真に使う感光液の作り方、音の振動数の計算式が表紙をも埋め尽くすように書き記され、熊谷が色彩や光、あるいは音など、感覚全般の諸問題について理論的、科学的な把握を試みていたことが近年指摘されている^{*1}。そんな数字と色名だらけのノートを捲ると突然、シェイクスピア『夏の夜の夢』の抜き書きに会う。それは日本語訳では次の箇所に該当する——「おれはよく朝の恋人オーロラとたわむれたものだ、それにまた、森番のように、森のなかを歩きまわり、ついにはあの東の空が燃えるように真紅(fiery-red)に染まり、大海原の暗緑の潮(salt-green)を、その美しい恵みの光で、金色(yellow gold)に変えていくのを眺めたものだ、この目で」^{*2}。日の出の時間、太陽の光があたりの風景を瞬く間に染めてゆく様子が、淡々と並ぶ色名によってテンポよく目に浮かぶ。そこに下線を引いた熊谷は、芸術作品における色彩の表現方法をあらゆる方法で根本から捉えようとしていたに違いない。

画家が色彩に関心を抱くのは必然的ともいえようが、その接近方法はさまざまだ。たとえば岡山県出身の画家・正宗得三郎(明治16(1883)-昭和37(1962)年)は東京美術学校で絵画を学び、熊谷とともに二科会や二紀会を組織し、長らく活動の場を同じくしつつも、熊谷とは異なる仕方で色彩に思いをめぐらせてい



図1:《蠟燭(ローソク)》
明治42(1909)年 岐阜県美術館

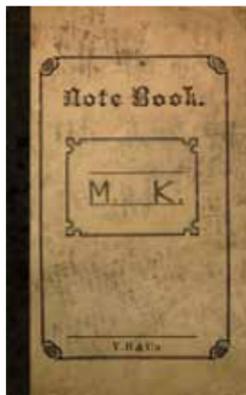


図2: 「MK」雑記帳 制作年不詳(大正14(1925)-大正15/ 昭和元(1926)年頃)
岐阜県歴史資料館

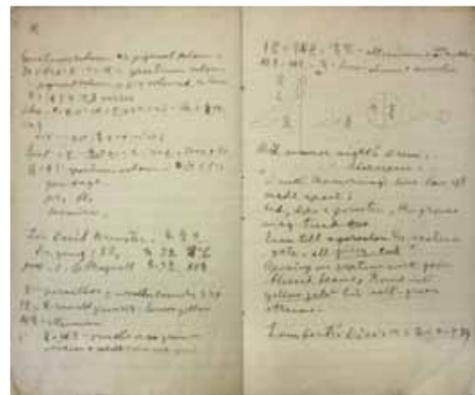


図3:《童子遊魚の図》昭和36(1961)年



図4:《夕映》昭和45(1970)年 岐阜県美術館

た。正宗が20代の頃から目指していたのはものの鮮やかな色彩に「耽溺」することで、それを音の旋律に喩え「色彩の音楽」^{*3}と詩的に表現した。それは高村光太郎が「緑色の太陽」を発表したのと同年のことだった(明治43(1910)年)。正宗は印象派の画家やマティスが用いる色彩に心を奪われ、当時多くの画家がそうしたように最新の美術の動向をつかもうと渡欧し、大正5(1916)年のパリでこのフォーヴの画家に面会したのだった。

熊谷もまた、マティスやドランらフランス近代絵画からの影響を指摘されてはいるものの、本人はあくまで西洋絵画との距離を保とうとしていた。柔らかな色彩の溶け合う様子や鮮やかで太い描線が晩年にいたるまで画中の随所に見られる正宗と異なり、熊谷の作品は、赤鉛筆などを用いてはっきりと慎重に引かれた輪郭線によって緊密に構築され、グラデーションを排し均等に塗られた色面を多用する。このいわゆる「モリカズ様式」は熊谷が50代のころの作品に登場し、60代になってようやく確立された手法だった。81歳で描かれた《童子遊魚の図》(昭和36(1961)年、図3)にもその特徴はよくみられる。過去に描いた海景を舞台に転用し、中央には熊谷が所有する泥人形によく似たモチーフが組み合わされている。熊谷はこの主題に類似する作品を少なくともほかに6点描いており、それぞれの色や形の組み合わせや変化を楽しんでいたようにみえる。ほかの作品でも、横たわる人物像の絵を傾けて「起き上がらせ」たり、元の作品のモチーフを反転させただけの作品を制作したりなど、自身のものの見え方がさまざまに変わる様子を実験するかのよう制作をつづけた。

これら光、色、形にまつわる一連の探求を総括するかのような作品が、90代を迎えるころにあらわれる。熊谷は支援者の一人であったギャルリームカイの画廊主・向井加寿枝との会話を機に、《朝のはぢまり》(昭和44(1969)年)をはじめとした同心円状に広がる光を描き始めたのだ。翌年の《夕映》(昭和45(1970)年、図4)もそのうちの一点だった。夕暮れの時間帯の空の色が、簡潔な円の重なりだけで表現されている。《朝のはぢまり》について画家本人は「目を開いたときに、明りが見えてくる具合」^{*4}を丸く描いただけのこと、とあっさり語る。しかし、光が「見えてくる」ようになったのは、自身の目にそれがどう映るのかを画家が考え、見つめつづけてきたがゆえにほかならない。

*1 蔵屋美香「いろいろな熊谷守一」『没後40年 熊谷守一 生きるよろこび』図録、東京国立近代美術館・愛媛県美術館、2017-18年、8-16頁。岡崎乾二郎「守一について、いま語れることのすべて」『近代芸術の解析 抽象の力』亜紀書房、2018年、134-187頁。

*2 ウィリアム・シェイクスピア『夏の夜の夢』小田島雄志訳、白水社、1983年、96、97頁。なお訳文中の下線は熊谷による。

*3 村山鎮雄『史料 画家正宗得三郎の生涯』三好企画、1996年、43-46頁に再録。

*4 「ディアローク1」(熊谷守一、安東次男)『みづゑ』No. 780、1970年1月、45頁。

【特別展】「熊谷守一 いのちを見つめて」(会期:2019年9月28日～11月4日)

太田三郎—此処にいます

廣瀬 就久(主任学芸員)



図1:《Date Stamps》No.96, 5 April 2019 to 13 July 2019 切手、消印 2019年 作家蔵

太田三郎氏(1950-)は現在の山形県鶴岡市に生まれ、94年より津山市に在住する美術作家です。鶴岡工業高等専門学校を卒業後上京し、グラフィックデザインの仕事に携わりました。84年に制作した《Print Works》から、切手と消印による作品を発表します。そして翌年から、郵便局で切手に消印を押してもらう行為を日課にした《Date Stamps》(図1)を現在まで制作しています。87年からは、独自のデザインによる切手型の作品制作を始めました。92年から発表する《Seed Project》(図2)では生命や種子の関係について、そして94年から発表する《Post War》と題する作品では、太平洋戦争について、関心を寄せています。

美術館での直近の個展(「太田三郎—日々」、山形美術館、2008)以降の制作として、東日本大震災をもとにした《瓦礫シェア》(2012)、そして親子の問題を取り上げた《石の小箱》(2007-19)、《あひるの家族》(2009-14)などの作品を紹介します。

展覧会の順路に沿って、主立った作品の見どころをお知らせします。

《Date Stamps》は、1985年7月5日から現在まで制作が進行しています。1シートに100枚の切手があるので、100日で1シートが完成します。今回の展覧会では、7月13日に完成した96シートまでを展示します。展覧会の最初、中央の展示室に96シートが時系列で並ぶでしょう。作家によれば展覧会の副題「此処にいます」は、この作品を毎日制作する気持ちであるとのこと。

《Post War》と題された一連の作品は、太平洋戦争を振り返りながら様々な事例を考える作品群です。《Post War 46-47 兵士の肖像》(1994)から、最新作の《Post War 74 折鶴焼》(2019)まで続いています。中国残留日本人孤児を取り上げた《Post War 50 私は誰ですか》(1995)と、戦没画学生を取り上げた《Post War 56 無言

館》(2001)では、戦争における個々の被害者に着目します。広島原爆被害については、《Post War 54 被爆地蔵》(1999)、《Post War 55 被爆樹》(2000)と《Post War 60 被爆者》(2005)を制作しました。《被爆者》では岡山県内に現存の被爆者取材しています。《Post War 66 戦災痕》(2011)では岡山空襲の戦災遺跡を主題に、《Post War 69 戦争遺児》(2014)では岡山県内在住の戦争遺児に取材しました。

2011年3月11日に発生した東日本大震災を機に、《Papers》(2011)と《瓦礫シェア》を制作します。《Papers》は、2011年1年間の新聞記事を取り上げました。新聞紙を1日ずつ分けて漉いているので365枚組の作品ができあがります。《瓦礫シェア》は漂着木材瓦礫によるペーパーウェイトです。2012年6月に宮城県石巻市を訪問した旅行で瓦礫を採集しました。2014年8月20日に発生した広島市土砂災害を機に《可部のおにぎり》(2014)を制作します。土石流の被災農家から譲り受けた稲を細かく粉碎し、真砂土を混ぜて作品を仕上げました。

《Seed Project》は、植物の名称、採集地と採集日を記録した種子を和紙のなかに封入する作品です。植物は、動物、風、水などの力を借りて種子を散布していきます。種子の散布と切手による郵送を関連づけて1991年から制作を始めました。

《石の小箱》と《あひるの家族》は人間の生命を取り上げています。《石の小箱》は、児童虐待に関する新聞報道が題材です。子どもの名前と、年齢、年号が小箱に記入され、箱のなかには小さな石が入っています。《あひるの家族》は、ダウン症児をもつ親の会「あひるの会」との関わりをもとに制作されました。親19点、子ども19点の作品を個々の生活についての解説を交えながら紹介しています。児童虐待で子どもを死なせた家族、そしてダウン症のなかで成長する家族について分かりやすく問いかけています。

展覧会場である2階展示室の外側、つまり1階エントランスホールから2階展示室に上がる階段右側の、中庭に面したラウンジに、新作《Bird Net》のインスタレーションを行います。農業用防鳥ネットの断片に切手を貼り合わせたパーツを大量に準備したうえで、パーツを絡めて空間を構成します。《Bird Net》を手がけた最初の会場は丙申堂(山形県鶴岡市)でした(2003)。その翌年に、同じ会場の個展で《バードネット—世界はつながっている》を発表しました。当館で開催した「目の目 手の目 心の目 体感の向こうに広がる世界」(2015)では、当館の所蔵品を交えたうえで展示室の壁に防鳥ネットを取り付けました。本展の場合、当館のラウンジには防鳥ネットを取り付ける梁や桁、そして壁はないので、床にバードネットを巡らせる形で制作します。

冒頭に展示する《Date Stamps》のあと『切手と消印』、『戦争』、『大災害』そして『生命』の4章を踏まえて、近作と新作を発表する大きな個展です。どうぞご期待ください。



図2:《Seed Project》アオカモシグサ
2002年6月9日 岡山県津山市山北
和紙、種子 2002年 東京都現代美術館蔵

【岡山の美術 特別企画】

「太田三郎—此処にいます」(会期:2019年9月28日~11月4日)

観覧料:一般 350円、大学生 250円、65歳以上 170円、小中高生無料

※同時開催の特別展「熊谷守一—いのちを見つめて」のチケットで無料で入場できます。

関連事業(※いずれも要観覧券)

1. 太田三郎氏による展覧会解説
9月29日(日) 13:30~14:30 会場:2階展示室
2. 太田三郎氏と柳沢秀行氏(大原美術館学芸課長)による対談
10月19日(土) 13:30~15:00 会場:2階展示室
3. 美術館講座「太田三郎作品を見る」
11月2日(土) 14:00~15:30 会場:講義室のち2階展示室
講師:廣瀬就久(主任学芸員)
4. 学芸員による展覧会解説(美術の夕べ)
10月25日(金) 18:00~18:30 会場:2階展示室 講師:廣瀬就久

第66回日本伝統工芸展岡山展関連事業

もっと伝統工芸 中国少数民族の衣装

福富 幸(主任学芸員)

当館では開館以来、日本伝統工芸展岡山展の開催にあたってはさまざまな付帯事業を行い、伝統工芸に対する親しみと理解を促すよう努めています。平成19年度からは部門やテーマを定めた特別陳列「もっと伝統工芸 技と美の出会い」を併催し、各作家の独自性や部門の特性をよりわかりやすく、つっこんで、また広がりをもって関連する作品を展覧しています。

令和元年度は、衣裳人形で国指定重要無形文化財保持者の認定を受ける秋山信子氏(1928-)が創作の糧とするため収集した中国少数民族をはじめとするベトナム、チベットの民族衣装を紹介し、子どもの健康や幸せを祈るもの、祭礼などで使用される精緻で手の込んだ縹染めや色鮮やかな刺繍、魅力的な織り文様—それらは心のこもった手仕事の温かさと各民族固有の美意識、文化の豊かさを伝えています。

秋山氏は平成14年、明治中期に鎖国下のチベットに求法のため旅し志半ばに客死した真宗大谷派の僧能海寛(1868-1901)、大阪堺の人で二度にわたり入蔵しチベット仏教を研究した河口慧海(1866-1945)の足跡を訪ねる旅に誘われたのが中国少数民族と出会うきっかけだったそうです。以前から秋山氏は居住する畿内から遠く離れた沖縄やアイヌなど独自の文化を築いていた人々に興味を抱き取材してきました。70歳を超えてからさらに遠く辺境の未知の土地で暮らす人々の暖かな人柄や厳しくも美しい自然に出会い、創作意欲をかき立てられたと言います。平成27年まで制作の合間をぬってたびたび貴州、雲南、湖南、ベトナム、シルクロード周遊など旅を重ね、そこからインスピレーションを得た作品を発表してきました。

—昨年秋山氏は長年現地を旅し収集したコレクションを地元大阪大谷大学博物館へ寄贈、広く公開研究に供されることになりました。本展は秋山氏ならびに大阪大谷大学博物館の全面的なご協力により開催するもので、普段なかなか目にすることのできない貴重な中国少数民族の衣装の数々、またそこから生まれた秋山氏の作品を合わせてお楽しみいただければと思います。



《白族》大阪大谷大学博物館



《苗族ジャケット風》(男の子4歳ボディ) 大阪大谷大学博物館



《トン族背負い布(ねんねこ)》 大阪大谷大学博物館



《トン族背負い布(ねんねこ)》(拡大) 大阪大谷大学博物館

【岡山の美術展】「もっと伝統工芸 中国少数民族の衣装」(会期:11月8日~12月15日)

展覧会スケジュール



2019. 夏 猛暑の中で

守安 収

『目の目 手の目 心の目 part2』展開催中(8.9~9.15)ということで、子どもたちの歓声が館内中に飛び交っています。タイトルだけではわかりにくいでしょうが、〈五感〉を使って美術を体験するという試みで、常設展扱いとはいえ、2階展示室全部と屋内広場、中庭等も使用する大掛かりなものです。7人の出品作家や他のアーティスト、さらにボランティアの力が加わって、トークやものづくりワークショップのイベント等もほぼ30を数えます。私も会場を訪れ、居心地の良い場所を探すのが日課です。本日のお気に入りには戸矢崎満雄さんの「棒ほど願えば針ほど叶う」と檜尾聡美さんの「みずまにまつわるかたち」。前者はハート形の泉に赤いボタンを投げ入れるというもの。元バスケット部員としては3回のトライ(ボタン1日3個まで)ならば3回とも命中といきたいところですが、連日やっても1個は外れて下に落ちてしまいます。願いが叶い難いのは人生と同じ。でも落ちたボタンはたくさんの失敗分と混じりあってそれなりにきれいに見えてきます。後者は天井から吊るされた大きな布の下、クッションに寝転ぶと照明から透過する色模様が気分を落ち着かせてくれ、あやうくそのままお昼寝するところでした。▼童心に帰るといって、毎夏恒例の中学校3年E組の同窓会が先日行われ十数名が参加しました。まもなく齢91を迎える担任のM先生がいつも足を運んでくださることが求心力になっています。卒業から50数年たっても「ちゃん、くん」で呼び合っていて楽しい時間を過ごしました。素晴らしい作品も良い仲間も時間を飛び越えていつも新鮮な喜びを与えてくれるようです。



〒700-0814 岡山市北区天神町8-48
TEL 086-225-4800 FAX 086-224-0648
Email kenbi@pref.okayama.lg.jp
www.okayama-kenbi.info

交通案内 JR岡山駅後楽園口(東口)から
・徒歩約15分
・路面電車 東山行「城下」下車徒歩約3分
・宇野バス 岡山後楽園バス「岡山県立美術館」下車すぐ
・岡電バス 藤原団地行「天神町」下車すぐ
開館時間 9:00—17:00 (入館は16:30まで)
「美術の夕べ」実施日と夜間開館日は19:00まで(入館は18:30まで)
休館日 月曜日(休日の場合その翌日)／年末年始／展示替え期間中

編集後記

三井麻央

今秋の岡山県は瀬戸内国際芸術祭や岡山芸術交流など「芸術の秋」を楽しめる大きな催しがたくさんあるそうです。もちろん当館でもみなさまを迎えるべく、地下展示室では熊谷守一展、2階展示室では太田三郎展を鋭意準備中です。時代は違えど、ともに静かな情熱を感じさせるふたりの展覧会をそれぞれお楽しみください。11月からはおなじみの日本伝統工芸展やI氏賞受賞作家展に加え、衣笠豪谷展も始まります。「衣笠豪谷って誰?」と思った方、ぜひ前号を振り返ってみてください(館ニュースのバックナンバーは当館ウェブサイトでも公開しています)。